

びしやもんでん 毘沙門天

その昔、芦沼村浄蓮寺に寺守をしていた徳兵衛さんという人がおりました。徳兵衛さんは、洪水があるたびに流木などを集め薪として利用していたのでした。

ある長雨の続いた日の朝のことでした。徳兵衛さんは早速川を見に行きました。

「ありや、川の水が大分出てんなや。流木がなか

んべか。」

川は長雨により茶色に濁りゴウゴウと音をたてて

流れておりました。川の中州辺りには、たくさんの

流木がありました。

「おおッ、あるぞ、あるぞ、はやく水がひかねえ

かな。」

徳兵衛さんは川を眺めながら、水のひくのが待ちどおしそうでした。数日後川の水も少なくななり、徳兵衛さんは、流木拾いに出かけました。小さな流木は籠に入れ、大きな物



には流木の上に石を二つ三つおきました。

当時、流木の上に石がある時は、持ち主が決まっていたという証で、その流木は誰も手をつけることができなかったのです。徳兵衛さんは、流木を束にし、背負って家に持ち帰りました。

その年の冬の朝のことでした。囲炉裏で流木を燃やし始めた徳兵衛さんは人形の形をした一本の流木がなかなか燃えないのを見て、不思議に思いながら、

「何でこの木は、燃えねんだんべ。」
手にとり、しげしげと見つめながら、

「そうか、細かく割らねえと燃えねえのか。」

と、斧でその木を割ろうとしました。するとどうでしょう、斧が流木にあたるやいなや、その流木から真っ赤な血が飛び散ったではありませんか、徳兵衛さんは腰を抜かすほどびっくり仰天してしまい、

「ややっ、何だこりや！ いったいどうしたこったんべ。」

木を割ることを止め、あわてふためきながら傷口をふさぎ、飛び散った血をきれいに拭き取りました。

徳兵衛さんは、

「これは、もしかして、神様でも宿った木ではあんめいか。とんでもねえことをしっち

まった。かんべんしてくれや。」

とつぶやきながら、その流木りゅうぼくに手てを添そえたのでした。

その後ご、浄蓮寺じょうれんじの第十二世だいじゅうにせいの住職じゅうしよくさま様がこのことを知しったある夜よるのこと、夢ゆめの中で、

「その流木りゅうぼくは、勝道上人しょうどうしん一刀三礼いっとうさんらいの直作じきさくの毘沙門天びしゃもんてん様さまじゃ。」

というお告つげがあつたといふのです。それを聞きいた徳兵衛とくべゑさんや村人むらびとは、

「こりや、えれいこつちや。粗末そまつにしちや、なんねいぞ。」

と、口々くちぐちにささやくようになりました。その後ご、村人むらびとたちはお堂どうを建立こんりゆうし、そこに毘沙門天びしゃもんてん様さまを安置あんちすることにしました。

村人むらびとの一人ひとりが、
「日光にっこうの方ほうから流ながれてきたんだんべえ。お堂どうは日光にっこうの方ほうをむけて建たてたほうがよかんべ

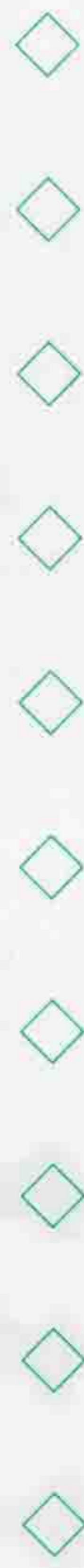
よ、

と、お堂どうは日光にっこうの方角ほうかくに門もんをかまえ、北向きたむきに建立こんりゆうされたのです。



毘沙門天像

この毘沙門天像は、徳兵衛さんが火にくべた時に付いたすすで、今では黒光りをした
光沢を放ったお姿になっています。
以後、この地方の守護神、災難除けの仏様として人々の信仰を受けています。



寛文二年六月十三日、長雨による大谷川の氾濫により川岸にあった日光
山麓多門坊のお堂が流失しましたが、この毘沙門天様は、その多門坊の中に
安置された神護、景雲元年勝道上人一刀三礼の作といわれ、日光山を開山
するおり安置した毘沙門天様だったと伝えられています。それが洪水によ
りはるばる現在の西芦沼の地まで流されて来たのだといわれています。

この毘沙門天は芦沼村宝葉浄蓮寺に安置されておりましたが、廃寺により
現在の場所にお堂を建立し、毘沙門天堂と称し、当地の守神として信仰され
ているのです。寅年に御開帳され、そのお姿を拝することができま
す。

毎年のお祭りは旧の一月十二日にお堂において行われています。